

『夜の寢覚』末尾欠巻部復元の問題点

——新出断簡分析の方法を模索して——

一 「座談会」のあとに

本年五月から六月にかけて新聞・テレビ等の報道で取り上げていただいたお蔭で、実践女子大学所蔵の伝後光厳院筆『夜の寢覚』断簡（次頁写真）は世間に周知されるようになった。

報道以前から当該の断簡の調査をすすめていたことはいうまでもないが、稿者がその中間報告としておおやけにしたのが、報道と前後して刊行した編著所収の『夜の寢覚』末尾欠巻部断簡の出現——伝後光厳院筆物語切の正体¹⁾——である。

そこで指摘したことは、おもに次のような点であった。

(1) 断簡冒頭にある和歌「しらざりしやまぢの月をひと

横 井 孝

りみてよになき身とや思ひいづらん」によって、散佚資料『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』『夜寢覚抜書』所収歌と合致し、まさに末尾欠巻部に相当する本文であることを証明できた、ということ。

(2) 筆跡・料紙・法量などの一致、類推から、既知の伝後光厳院筆未詳物語切と一連の断簡と見なしうること。

(3) したがって、従来指摘されていた同類の古筆切は『夜の寢覚』のそれ——しかも末尾欠巻部の一部と見て大過なく、仁平道明が問題提起をして以来議論の的となってきた伝後光厳院筆未詳物語切一葉・全一〇〇行を、そのまま『夜の寢覚』研究に参加させること。

(4) 当該の実践女子大学蔵断簡によれば、主人公・寢覚

後光嚴院

の上の目に「女三宮いとうつくしう……」と映じており、両者が直接の接点をもっているように読めるが、これまでの末尾欠巻部に関する知見になかった。欠巻部の推定に依存せざるをえないわれわれにとつて、「推定」というものの位置づけについて反省をせまる資料

でもあった、ということ。

特に(1)・(2)を踏まえて(3)が重要なことと考え、新聞・テレビ等の取材でもそのことを強調した。仁平道明が架蔵する未詳物語切を『夜の寝覚』の、ながらく、幻³となつていた末尾欠巻部の、しかも——主人公・寝覚の上が冷泉院によつて幽閉され、いわゆる「偽死事件」が惹起する——物語の山場に近い場面ではないか、と問題提起をして以来、賛否両論によつていわば宙ぶらりん状態にさらされていた一連の伝後光嚴院筆切が、これを機に定位をえることになつたとすれば、学界にとつて慶賀すべきことといわねばならない。

——とすれば、問題はまた別のところから発生する。右の私論を掲載した書『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』の発刊に先立つて、版元(武蔵野書院)の主宰による座談会³がもよおされ、斯界の第一線の研究者たちのさまざまな批判をおおぐことができた。そのなかで、中川照将がつぎのような発言をしている。

横井先生が今回の切を発見したと初めて聞いたときは、びっくりして、衝撃を受けました、というのが最初の感想。で、これから『寝覚』研究がどうなっていくんだらうというのが、第二の感想です。おそらく横井先生の(発見した)切は間違いなく『寝覚』のもの

で、この点に関しては動かないだろう。その上で、周辺の資料がどういうふう^①に連動していくかという点に興味があります。……（略）……

まあ、この後どういふうな話の流れになっていくか分からないですけど、最終的には末尾欠巻部分の復元作業というところに話が進んでいくんですね。私なんかは、こういう新たな決定的な資料が発見されたとなると、復元に関して、また『寢覚』研究が暴走するんだらうなって、恐ろしいなって。その暴走をどこまで抑えられるか、資料に基づいて、いかに理性的に考えることができるかが、一番重要なところだと思っています。……^②

専門の近い顔見知り同士の間の発言なので表現自体はラフ（rough）で、発言の後半部分、「復元に関して、また『寢覚』研究が暴走するんだらうなって、恐ろしいなって」とあるのは、くだけて無造作な物言いのようではあるが、内実は服膺すべき発言内容だと思ふのである。

『夜の寢覚』中間・末尾の欠巻部に対して、先駆的な松尾聡の研究以来、これまで散佚資料を駆使した「復元」案が数多く積み重ねられてきたことは、いまさらいうまでもなからう。作品を論ずること自体が復元案の様相を呈するのが『寢覚』研究の特徴なのである。しかもその復元案は

微に入り細に入り、——いま申したごとく「散佚資料を駆使」し、徹底的な読み込みのもとに論じられている。研究の名のもとには必然のながれというべきであらうが、中川はその状況を「また『寢覚』研究が暴走するんだらうな」といい、「恐ろしいな」と表現したものと思われる。それを服膺すべきだというのは、稿者なりのいい方をすれば、散佚資料が右のような「駆使」に堪えうるものなのか、資料批判が十分なされてきたか、ということを問いたいのである。

この件については、座談であることをよいことに、稿者も勢いで、かなりラフ——この場合は、中川と違って「不用意に」「が、さつ、に」の意味で——に発言している。

ただ、私の文章の最後のところで逸文資料にちよっと疑いを抱いている部分があったんですが、踏み切れなかったところがありますね。やっぱり逸文資料は、一応絶対のものだつていう固定観念があったものですから。なにせ『拾遺百番（歌合）』は定家ですからね。これはやっぱり慎重にかからないといけないですね。やっぱり定家なりの「改作」があると考えないと、『拾遺百番』を使うのは、今後はもっと慎重にならないといけない^③。

それこそ、研究の方法についての発言は、もっと慎重に

ならないといけない。ただし、右の直後の発言にあるように、「散逸資料にはバイアスがかかっている」はずなのである。その資料批判を十分に済ませぬままの議論は、当然消化しきれぬ捻れが生じる可能性を払拭できないはずでもある。

本稿は、右のラフな発言が真にがさつで不用意であったのか、あるいは、それにもかかわらず、結果として検討する余地のあるものであったか、はたまた、座談会の後始末としてみずから責任をとりきれぬものか否か、ある程度の見通しを立てたい、ということから出発する。

二 『源氏』本文の問題点

いまさら注釈をつけるまでもなからうが、座談会で「なせ『拾遺百番』は定家ですからね」といったのは、藤原定家に対する世評に寄りかかったもの。

廣田收・久保田孝夫と『紫式部集』についての鼎談をおこなった際、廣田からその師匠・南波浩による定家評として「先生は定家が大嫌いだっただ。定家は必ず手を入れる。だから、先生は……『定家は^{てきや}的屋だ』『定家は^や香具師だ』と」⁷ といっただけでなく、物語のテキストをつくる際にはかならず底本に非定家本を採用していた、と教わった。これ

などは、その「世評」の最たるものであるう。

すでにわれわれは、御物本『土佐日記』によって、紀貫之自筆本にどのような「手を入れ」たか、定家の操作の実例を知ってしまったている。ほかにも、定家本と非定家本の双方が存在する古典籍の実例を見ている。現存本のすべてが定家本に淵源をもつ、たとえば『更級日記』のような作品でも、外部資料——了悟「光源氏物語本事」(『幻中類林』)——のあげる非定家本の本文が、かなりの差異を有するらしいことを示すことができる。

もちろん、それらの事実が『拾遺百番歌合』の、特に詞書にあらわされた物語の紹介(梗概)が定家によって「改作」されたことを十全に証明するものではない。藤原定家撰のすべてを疑っているのは、『寝覚』の欠巻部のごとき資料に欠ける部分の研究などできたのではない。さりとて、一部とはいえ定家書写本の実態を垣間見てしまったわれわれは、もはや無邪気に気楽にそれを利用するわけにはゆかないだろう。

ここではまだ『拾遺百番歌合』全体について論じる用意はない。もっぱら『寝覚』とそれに番われている『源氏』の詞章(の一部)を検討することとしたい。

たとえば、十七番の本文。

左 すまのうらへおぼしたちし

ころ、院の御はかにまいむらせ
たまひて

なきかげもいかに見るらむよそへつ、
ながむる月もくもがくれぬる

(二三三)

右 「は、うへかくれたまひぬ」とき

こえし時より、きたやまにこ

もりゐて、つぎのとしの春、さ

くらにつけて中宮に

右大将

しらざりし宮まがくれの花のいろを

あはれむかしとなくくぞ見る⁽⁸⁾

(二三四)

左方の『源氏』歌は詞書に記されるとおり、須磨の巻、
旅立ちの準備のさなか、藤壺の宮をおとずれた後、桐壺院
の陵前で「なきかげ」の歌を詠ずる。明融本（実践女子大
学本）の本文をあげてみよう。

……………あすとてのくれに

は、院の御はかをがみてまいり給とて、北山

へまうで給ふ。あか月かけて、月いづる

ころなれば、まづ入道の宮にまうで

給。……………「御山

にまいり侍るを、御ことづつてや」ときこえ

給に、……………(略) ……月まち

いで、いで給。御ともにたゞ五六人許、しも
人、むつまじきかぎりして、御むまに

てぞおはする。さ、なることなれど、ありし

世の御ありきなことなり、みないとかなしう

おもふ中に、かのみそぎの日、かりのすひじん（隨身）

にてつかうまつりし右近のぞう（将監）の蔵

人、うべきかうぶりもほどすぎつるを、つ

るにみふだ（御簡）けられ、つかさもとられては

したなければ、御ともにまいるうちなり。かも（賀茂）

のしもの御やしろを、かれとみわたすほ

ど、ふと思ひいでられて、おりて御馬をの

くちをとる。

ひきつれてあふひかざし、そのかみを

おもへばつらしかものみづがき」といふを、げに

いかにおふらんと人よりけにはなやかなりし

ものとおほすも心ぐるし。君も御馬よりをち

給て、みやしろのかたをおがみ給とて、神に

まかり申給。

うき世をばいまぞわかる、とまらむ

名をばたゞすの神にまかせて」との給さま、

物めでするわかき人にて、身にしみてあは

れにめでたしと見たてまつる。御山に

まうで給て、おはしまし、御ありさまのめ
まへのやうにおほし出らるゝ。かぎりなきに
ても、よになくなりぬる人ぞ、いさむるかたなく
くちおしきわざなりける。よろづのことをな

くく申給ても、そのことはりをあらはに
えうけたまはりたまはねば、さばかりおほし
の給はせしさまくの御ゆひごむは、いづくへか
きうせにけんといふ、かひなし。御はかはみ
ちの草しげくなりて、わけいり給(ふ)程、いとゞ

露けきに、月も雲がくれて、もりの木だち
木ぶかく心すごし。かへり出んかたもなき
心ちして、おがみ給に、ありし御面かげさ
やかにみに給へる。そゞろさむきほどなり。

なきかげやいかゞみるらんよそへつ、

ながむる月も雲がくれぬる」あけはつる

程にかへり給て、春宮に御せうそこきこえ給。……

(17ウ5行目く21オ4行目〓四〇七頁9く四一〇頁4)

いま、底本の改行のままに本文を掲げた。右近将監の「ひ
きつれて」、対する源氏の「うき世をば」の二首は、ほか
にも例が多い歌の書式——改行一字か二字下げ、歌末は地
の文に接続して改行なし、という方法によっているが、『拾
遺百番歌合』の依拠する「なきかげ」の歌のみ、上の句末

で改行、下の句は地の文につづけるといふ書記法になつて
いる。

『拾遺百番歌合』の本文にふれるまえに、この歌の書式
について寄り道しておこう。

明融本の須磨の巻は墨付四九丁。二六丁6行目の途中か
ら明融を伝称筆者とする筆跡に交代するが、当該箇所は不
明。卷中四九首の歌をおさめるが、この不明氏の書写部分
の一九首をふくめ、右の引用「なきかげ」の歌以外は、す
べて改行・字下げにするものの、下の句もつづけ書きする、
例の多い本文形態なのである。

近年、物語本文内の和歌の書記法のありかたについて論
じる好論^⑨があいついでおり、本稿の指標となりうるもので
あり、この情勢はありがたい。そこで整理されているのは、
加藤洋介のまとめたところによれば、

A 和歌独立型。和歌二行書、第一・二行ともに地の文

より一〜二字下げて書き始め、二行で書き終わり、続
く地の文は改行して、行頭から空き字なしに書く。

B 地の文融合型。和歌二行書(三行になることもあり)、

第一のみ改行して地の文より一〜二字下げて書き始
め、二行目は地の文と同じ高さに書き、続く地の文は
改行せずに和歌に続けて書く。

C 折衷型。和歌二行書(三行になることもあり)、第一・

二行ともに地の文より一〜二字下げて書き始めるが、続く地の文は改行せずに和歌に続けて書く。

など（Bの亜種であるDを含めて）がおもな書式となるという。

明融本の須磨の巻はおおむねB型なのだが、問題とする箇所はC型ということになる。加藤の調査によれば、桐壺の巻以下の東海大学蔵明融本九帖・尊経閣文庫蔵定家自筆本二帖はB型を基本としながらも、他書式が混在しているという。実践女子大学蔵の明融本も須磨の巻などは同様にいうることになるか。加藤が「不統一性が書写者に起因している可能性」をいうとおり、伝明融の筆跡の部分は他巻でもほぼ一貫しており、不明氏の部分で右のように生起していることを勘案すべきだろう。

さらに、右の須磨の本文で気がかりなのは、傍線をほとんどこしたように、『拾遺百番歌合』の光源氏の独詠の初句を「なきかげも」とするところ、『源氏物語』では「なきかげや」となっていることである。右には明融本本文で引いたが、『源氏物語大成』未所収の飯島本・保坂本・ハーバード大学蔵本・伏見天皇本・三条西家日大本・幽齋本・公条本（実践女子大学山岸文庫蔵）・古活字本・湖月抄等々の諸本に異同がない。

定家自筆本たる『歌合』撰集時に彼の座右にあった『源

氏』本文が、現存の定家本『源氏』と一致しないというのは、どう考えたらよいのだろうか。『歌合』巻末の奥書に、

此哥先年依後京極殿仰

給 宣陽門院御本物語所

撰進也 私草被借失了

仍更求書写本令書留之

とあるように、京極良経の仰せによつて撰進された当時、定家の「私草」が失われており、あらためて写した本を手許に書き留めておいた、という。伊井春樹は、この「更求書写本」と『明月記』嘉禄元年（一二二五）二月一六日条に「建久之比、被盜失了」そのため「家中無此物」だったが、このほど「源氏物語五十四帖」書写が完成したという記事との関連をもとめ、「現存する定家筆本の出現には二段階の成長があり」、そのほさまに『拾遺百番歌合』の撰進があったという。

『拾遺百番』依拠の本文が「青表紙本成立以前の定家本」であり、それが嘉禄元年の校訂本に引き継がれている可能性を読もうとする安宅克己の論がある一方で、河内本・別本とも一致する本文のあることを指摘しつつ、青表紙本成立以前の状況として不自然ではないことを評価する加藤洋介の意見もある。今後の検討課題である。

三 詞書の方法

さて、寄り道が長くなつてしまつた。本稿の問題意識にいそぎ戻ることにしよう。『拾遺百首歌合』十七番の本文について、であつた。

『拾遺百番』の左方の詞書は「すまのうらへおぼしたちしころ、院の御はかにまゐらせたまひて」について、前半は物語展開を縮約したもので、直接『源氏』本文を引いたものではない。後半「院の御はかに……」は、まったく合致するわけではないが、本文に「院の御はかをがみてまいり給とて」「御山にまいり侍るを」「御山にまうで給て」など類似の表現を見いだすことができる。しかも、「なきかげや」の歌は、「いかゞみるらん」と桐壺院に向けての訴えの姿勢があるわけであるから、詞書の「まゐらせたまひて」という縮約は不当なものではない。

一方の右方『寢覚』のそれは、右大将（「まさご」であろう）が母寢覚の上の死の報に接した衝撃のために北山に籠もつたとあるが、「は、うへかくれたまひぬ」が物語中の台詞を直接引用した本文なのか、あるいは台詞を変型させたものか、『源氏』須磨の例をもつて類推するとしても、判断の材料がない。いわゆる末尾欠巻部の歌と見なせるため、本文と照合することができないからである。

そもそも、梗概・あらすじのように物語を圧縮して提示するためには、次のような方法がとられるように思われる。

- (1) 点綴
- (2) 省略
- (3) 取意

(1)は引用本文をもつて点綴する方法。(2)は本文から離れて全体を圧縮する方法。(3)もまた似たようなものだが、(1)の中間的方法としてあげてみた。いずれも截然と区切れるわけではなく、(1)(2)(3)の境界線はそれぞれ曖昧だが、縮約の要素を認識するひとつの目安、いわば便宜である。しかも、それぞれの要素は複合的に用いられるのがふつうである。しいていえば十七番の左方は(2)と見るべきだろうが、「座談会」で「なにせ『拾遺百番』は定家ですからね」と放言したものの、すくなくとも十七番の左方の詞書に限っては、右に見たようにさほど不当な縮約ではなかつた。

しかし、問題は実践女子大学の所蔵に帰した新出の断簡にかかわる部分に顕在化している。断簡の本文はこのようなものだつた（句読濁点等を付す）。

しらざりしやまぢの月をひとりみて

よになき身とや思ひいづらん」とのみながめ

いらたまふに、女三宮いとうつくしうもの
おもひしりおよづけ給つ、は、の女御の

御ことおほしいづるなめり。おほどかにうちなが

めいで、つゆけなる御袖の気色もいみ

じくらうたげなるに、かくこそはたれも

おほしいづらめ、と思ひやるにさへ、いとながめ

いづるにつけても、なつかしくうちかたらひ、

かゝる人もおほせざらましかば、とおもふにも

この断簡の直前の本文がまだ発見されていないため、直接の対照ができないのは残念であるが、『歌合』を含む散佚資料と比較してみれば、つぎのようになる。

〔『拾遺百番歌合』八番〕

右 右大将、三ぬの中將ときこえ

し、「きたやまにこもりぬ」

とつたへき、て

しらざりしやまべの月をひとり見て

世になき身とやおもひいづらむ

(二二六)

〔『風葉和歌集』卷第一七・雑二〕

世になきさまに聞えてのち、「右大将、北山にこ

もれり」とつたへき、て、月のあか、りける夜、

なかむらんおもかげもみるこ、ちして思ひやられ

ければ ねざめの広沢の准后

しらざりし山べの月をひとりみて世になき身とや思ひ

いづらむ

(二二七〇)

〔伝後光厳院筆『夜寝覚拔書』〕

あはれ我を思いづる人もあらむかし。三位中將、山ふかくあとをたち、たえこもりたるらむ心□しのほどよ。

いかでゆめ□うちにも、□くてあるぞとしらせてしが

な。おさなき人ぐの、さまぐ恋しさなど、身をせ

むるやうに、いとたへがた□にも、ものおもふ秋はあ

またへにしかど、いとかくしもは、おほえざりきかし。

しほれわび我ふるさとのおぎの葉に

みだるとつげよあきのゆふかせ

しらざりし山ちの月をひとりみて

世になき身とやおもひいづらむ (散らし書きを便宜的に整理表記した)

〔『拾遺百番』詞書の前半「右大将、三ぬの中將ときこえ

し」は、十七番左の「すまのうらへおぼしたちしころ」と

同様、物語中の時期・所在をしめす縮約であり、取意と見

なしうる例である。ただ、その直後「きたやまにこもりぬ

ぬ」は寢覚の上に伝達したひとの台詞の引用のように見え

るが、『風葉集』では「右大将、北山にこもれり」とあり、

この表現の相違は誤写や誤認の差異ではあるまい。また、

大阪青山大蔵『拔書』には「三位中將、山ふかくあとをた

ち、たえこもりたるらむ心□しのほど」とあり、これは詞

書と直接対応する本文ではないとはいいうるにせよ、表現

は微妙に錯綜する。

つまり、『拾遺百番』の「きたやまにこもりぬ」も『風葉集』の「右大将、北山にこもれり」も対立しあっているため、いずれか一方が『寢覚』の散佚本文を直接引用した本文とは証しえない、ということになる。かろうじて、両者には「つたへき、て」の六文字が一致して、物語の展開にそのような事実——何者かによって寢覚の上に「まご」が北山に隠棲したとの消息がもたらされるということ——があつたことを証明しているにすぎない。『抜書』が、寢覚の上が「三位中将、山ふかくあとをたち、たえこもりたるらむ心□しのほどよ」という感懷をもらしているところからも補強されることではある。

『拾遺百番』の詞書がどのような基準で作られているかについては、贈答の贈歌あるいは答歌のみを採用する際の片割れについてのおつかいを論じた米田明美の論⁽⁵⁾ほか、積極的に説いているものは（もとより管見ではあるが）見かけない。米田は、

(A) 詞書に贈歌一首を記し、その答歌であることを示すもの。

(B) 詞書に贈歌の一部を記し、その答歌であることを示すもの。

の二種の書きわけがあるといい、『拾遺百番』では(A)

が圧倒的に多く、その贈歌が『歌合』内に採用されていないこと、また(B)の場合にはほぼ『歌合』内にその歌があることを示している、と指摘する。

(A)の例は、たとえば『拾遺百番』十一番。

左 かしは木の権大納言、をきて

ゆくそらもしられぬしの、めに

いづこのつゆのか、るそでなり、

とうれへきこえけるかへし

二品内親王朱雀院第三

あけぐれのそらにうき身はきえな、む

ゆめなりけりと見てもやむべく

右 ねざめのなげきのはじめ、

あか月のわかれに、世にしら

ぬつゆけさなりやわかるれど

またいとか、るあか月ぞなき、

と侍りけるかへし

民部卿室

しらつゆのか、るちぎりを見る人も

きえてわびしきあか月のそら

(B)の例は、たとえば『拾遺百番』十四番。

左 宮すん所かくれてのち、内より、

みや木の、つゆふきむすぶ

(二二二)

(二二二)

こがらしに、とおほせごとありければ

桐壺更衣母

あらかきせふせぎしかげのかれしより

こはぎがうへぞしづ心なき (二二七)

右 中納言の君、きえかへりてもいつか

わすれむ、ときこえけるかへし

右大将

ふきはらふあらしにわびてあさぢふの

つゆのこらじと君につたへよ (二二八)

十四番左歌の「みや木の」は前『百番』の五十六番歌左

歌(二二六)に採用されている。定家の撰集方針が看取で

きるところであろう。米田は、『拾遺百番』における(A)

(B)の差異は「歌の重複を避けるため」の配慮であり、「定

家が工夫を重ね」た結果だ、と説いた。この、贈答歌の引

きかたに対する判断には、いま異論はないが、ここでは物

語本文の梗概化、圧縮の方法について直接論じたものでは

ない。むしろ、右の論中に「詞書を付すことに、定家は細

心の注意を払った」「工夫を重ね、何とも見直したであろう」

と推定していることに、本稿ではこだわりたいのである。

十一番右の詞書「ねざめのなげきのはじめ、あか月のわ

かれ」は、現存巻一の法性寺僧都の九条邸での主人公と中

納言の出会いの直後、但馬守女と誤認したまま「月も入」

るころ、夜の闇のなかにわかれる際の中納言と対の君(の

ち民部卿室)との贈答をさす。「世にしらぬ……」は中納

言の歌。それへの答歌が「しらつゆの……」なのである。

詞書のしめすところは、物語本文が現存しているので芋を

とるのは容易である。しかし、本文の支援なしに詞書だけ

で展開を読みとろうとするのは、かなり困難とすべきで

はなかるうか。

十四番右歌の場合はなおさらで、傍線をほどこした和歌

の下句をのぞけば、詞書は「中納言の君……ときこえける

かへし」としかないのである。

いづれにせよ、こうした詞書のありようは、すでに物語

の展開を承知している人間に対するものでしかないのだ。

詞書が物語内容の圧縮を免れぬとすれば、そこに縮約をは

かる撰者のバイアスがかかることは必然化する。「点綴」「省

略」「取意」のどれをとつても、何を選択するか、それを

どう表現するかは個人差が生じる。その「個人差」——つ

まり、特定個人による方法意識——を見きわめる努力が要

請されている、ということではないのか。

四 伝後光厳院筆断簡のさきへ

今回の古筆切発見をめぐって、座談会で中川照将の発言は、一見挑発的な放言に似ていた。——「こういう新たな決定的な資料が発見されたとなると、復元に関して、また『寢覚』研究が暴走するんだらうなって、恐ろしいなって」——散佚資料に対する徹底的な読み込みの果て、結果的には論者の数だけ復元案があるという現状への皮肉以外のなものでもない

『夜の寢覚』は、先にもふれたことのくりかえしになるけれども、これを論ずること自体が（一定程度以上に）復元案の様相を呈してしまうものなのだ。断片的な資料を通じて欠巻部を遠望したうえで現状を把握しなければならぬ。散佚資料は貴重な証言者ではあるが、そもそも資料批判にたえうるものか、今後はいっそう慎重にはならなければならないと思う。

さりとて、散佚資料がかぎられていた一時期の研究段階のように、欠巻部を『幻』のあなたに押しやって、現存形態での決着を急ぐのは、現状にそぐわない。実践女子大学蔵の新出断簡をはじめとする一連の伝後光厳院筆切だけでも、二〇一四年九月現在、一六葉の存在が知られている。前稿（注1論文）の段階から一歩だけ先に進んだ一覧表を

次にあげておこう。

- ① 個人蔵古筆手鑑所収・『古筆学大成 第二十五卷 漢籍・仏書・其の外』所載切……………一〇行
- ② 永青文庫蔵古筆手鑑『墨叢』所収・伝後光厳院筆物語切……………八行
- ③ 徳川黎明会蔵古筆手鑑『集古帖』所収・伝後光厳院筆物語切……………六行
- ④ 思文閣『名家古筆手鑑集』『古筆手鑑(5)』所収・伝後光厳院筆物語切……………九行
- ⑤ 仁平道明蔵・伝後光厳院筆物語切……………九行
- ⑥ 東北大学附属図書館狩野文庫蔵・伝後光厳院筆切……………一行
- ⑦ 専修大学図書館蔵古筆手鑑『墨跡彙考』所収・伝後光厳院筆切……………九行
- ⑧ 個人蔵古筆手鑑所収（東京大学史料編纂所蔵写真帳所載）切……………一〇行
- ⑨ 善光寺大勧進蔵古筆手鑑（貼交屏風）所収・『善光寺本坊大勧進宝物集』所載切……………六行
- ⑩ 池田和臣蔵・伝後光厳院筆物語切……………一行
- ⑪ 小林茂俊蔵古筆手鑑『かたばみ帖』所収・伝後光厳院筆物語切……………一行

- ⑫ 実践女子大学蔵伝後光嚴院筆『夜の寢覚』切
 …… 一〇行
- ⑬ 西尾市岩瀬文庫蔵『芳翰模彙』所収・伝後光嚴院筆物
 語切…………… 一〇行
- ⑭ 南園文庫蔵・伝後光嚴院筆切…………… 一〇行
- ⑮ 出光美術館蔵古筆手鑑『墨寶』所収・伝後光嚴院筆物
 語切¹⁷⁾…………… 一〇行
- ⑯ 個人蔵・伝後光嚴院筆切…………… 三行

ここでは一四三行、約二五五〇字の末尾欠巻部の本文が出そろっているのである。これは四〇〇字詰め原稿用紙に換算して六・三六枚。末尾欠巻部の総体からみればごくごく僅かではないだろうが、推理と憶測で補完する散佚資料とは異なり、本文そのものがこれだけ研究者の前に供せられたのである。ゼロから一気に二五〇〇字あまりの本文を手に入れたのは大きな収穫といわざるをえない。強調するに足る現実なのである。

このほかにも伝慈円筆六半切二葉¹⁸⁾(二六行・五三三三三)があり、伝寂蓮筆国宝『寢覚物語絵巻』詞書があり、伝後光嚴院筆『夜寢覚抜書』がある。今後はこれらの古筆資料を「駆使」する段階である。それぞれの古筆切の配列も、いまださだかではないのが現状である。

さらに、散佚資料自体の徹底的検証が必須の作業として前に横たわっている。ここではもっぱら『拾遺百番歌合』の問題点をあげつらったが、『風葉集』の詞書もまた、同様な検証作業がもとめられるだろう。本稿はその前段階として、先の「座談会」での稿者の放言を反省しつつ、ささやかな問題提起をしたものである。

注

(1) 横井「『夜の寢覚』末尾欠巻部断簡の出現——伝後光嚴院筆物語切の正体」(横井・久下裕利編『考えるシリーズⅡ』^①_{掲発} 王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発) 武蔵野書院、二〇一四年五月刊、所収。

(2) 仁平道明「『夜の寢覚』末尾欠巻部断簡考——架蔵切後光嚴院筆切を中心に」(久下裕利編『狭衣物語の新研究——頼通の時代を考える』新典社、二〇〇三年七月刊、所収。のち『物語論考』武蔵野書院、二〇〇九年三月刊、所収)。

(3) 横溝博(司会)・大槻福子・久保木秀夫・中川照将・仁平道明・横井「特集 座談会 夜の寢覚」(『武蔵野文学』二〇一四増刊春号、二〇一四年五月)、表紙に「寢覚める古筆切」というキヤッチ・コピーを付す。以下、単に「座談会」と略称する。

(4) 注3「座談会」、六～七頁。

(5) 当該方面の研究では常識的な著書であるが一応挙げておく。松尾聡『平安時代物語の研究——散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論』（東宝書房、一九五五年六月刊）。

(6) 注3「座談会」、三〇～三二頁。

(7) 『鼎談「紫式部集」研究の現状と課題 I』（廣田收・久保田孝夫・横井『紫式部集からの挑発——私家集研究の方法を模索して』笠間書院、二〇一四年五月刊、所収）、一五六頁。この鼎談は二〇一二年九月一日・二一日の二日間におこなった。

(8) 『拾遺百番歌合』本文は、日本古典文学影印叢刊『物語二百番歌合 風葉和歌集桂切』（日本古典文学会貴重本刊行会、一九八〇年八月刊）による。

(9) 『源氏物語』本文は明融本（実践女子大学本）により、句読濁点等の記号を付した。『源氏物語大成』校異篇の頁数によって所在を示した。

(10) おもな文献としてつぎのことがある。

(a) 阿部秋生「解説」（陽明叢書『源氏物語一（翻刻・解説篇）』思文閣出版、一九七九年刊、所収）

(b) 田村悦子「散文（物語・草子類）中における和歌の書式について」（『美術研究』第三二七号、一九八一年七月）

(c) 田中新一「王朝物語本における和歌書式」（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院、一九九七年二月刊、所収）

(d) 今野真二『仮名表記論攷』（清文堂出版、二〇〇一年一月刊）

(e) 池田和臣「源氏物語の文体形成——仮名消息と仮名文の表記」（『国語と国文学』第七九卷第二号、二〇〇二年二月）

(f) 加藤昌嘉「源氏物語」は、手でかかれたものに他なりません。（『日本文学誌要』第八〇号、二〇〇九年七月）

(g) 加藤洋介「大島本源氏物語の本文成立事情——若菜下巻の場合」（中古文学会関西西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院、二〇〇九年一月刊、所収）

(h) 今野真二「日本語の考古学」（岩波新書・岩波書店、二〇一四年四月刊）

(i) 加藤昌嘉「和歌の書記法」（伊井春樹編『日本古典文学研究の新展開』笠間書院、二〇一二年三月刊、のち加藤『源氏物語』前後左右）勉誠出版、二〇一四年六月刊、所収）

(j) 岡田貴憲『和泉式部物語』諸本論の再検討——和歌様式の問題を手がかりに（『中古文学』第九〇号、二〇一二年一月）

先行研究については加藤昌嘉の(f)(i)に教えられるところ大きい。田村(b)は表題のテーマでは先駆的な論であり、

なおかつ現在も基本文献たりうるが、加藤以外に引くところがないのはなぜであろうか。

(11) 伊藤鉄也編「ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」」(新典社、二〇一三年一〇月刊)による。

(12) 伊井春樹「物語二百番歌合の本文——定家所持本源氏物語の性格」(大阪大学『語文』第四八輯、一九八七年二月)のち『源氏物語論とその研究世界』風間書房、二〇〇二年一二月刊、所収)。

(13) 安宅克己「青表紙本源氏物語成立以前の定家本」(『学習院大学国語国文学会誌』第二六号、一九八三年二月)。

(14) 加藤洋介「河内本について」(秋山虔・室伏信助編『源氏物語の鑑賞と基礎知識』二〇〇三年六月、所収)。

(15) 米田明美「『物語二百番歌合』の詞書一考——贈答歌の記述」(樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院、一九九七年一二月刊、所収)。

(16) 野口元大「『夜の寢覚』の主題と構造(上・下)——『夜の寢覚たゆるよなくとぞ』」(『文学』第三五卷第四・五号、一九六七年四・五月)のち『夜の寢覚研究』笠間書院、一九九〇年五月刊、所収)など。

(17) 実践女子大学創立二二〇周年記念企画「宮廷の華・源氏物語」のシンポジウム「源氏物語と古筆切」(二〇一四年六月七日、於実践女子大学創立二二〇周年記念館)に

おける別府節子「出光美術館蔵の古筆手鑑所収の源氏物語切を中心に」の発表による。

(18) 『古筆学大成』第二五卷、漢籍・仏書・其の外(講談社、一九九三年一二月刊)所収の「伝藤原有家筆未詳物語切」(二七六頁)は、寸法(二二・〇cm×一八・二cm)、料紙(鳥の子)、一面行数(二三行)、筆跡など、この伝慈円筆『夜の寢覚』切と一致する。末尾欠巻部の断簡と見て間違いない。これについては田中登『古筆切の国文学的研究』(風間書房、一九九七年九月刊)、同『失われた書を求めて——私の古筆収集物語』(青簡舎、二〇一〇年四月刊)に詳述されている。

(よこい たかし・実践女子大学教授)